

C-2 岩沼市寺島新浜地区

2011年12月23日(金)

報告者名	滝澤 克彦	被調査者生年	① 1931年(男)、② 生年未確認(女)
調査者名	滝澤 克彦	被調査者属性	夫妻、花卉農業
補助調査者	兼城 糸絵		

話者について

50年ぐらい花卉農業をしていた。300坪の農地で、温室も利用し、チューリップ、パンジー、カーネーション、デイジーなどを栽培する。近所の人を雇い、仙台市へ卸していた。地震により温室は全てだめになり、倒壊したままになっている。ちょうどチューリップ1万本を育てているときだった。また、母の日へ向けて出荷前だったカーネーションや卒業式用の花など何千本もだめになった。

新浜部落について

新浜はもともと阿武隈川の川沿い、堤防の河川側にあった。昭和16年の河川改修工事によって現在の場所(一部は海沿い)へ移ってきた。話者家はもともと川の中にあった島に住んでいた。伊達藩の倉庫だったという。その倉を「納屋」と呼び、左側には塩を右側には鮭を保管していた。その島に住んでいた2軒は、江戸か明治のころに河原へ移動した。昭和59年の市史編纂のとき編纂室員がやってきて調査をした。そのときの写真が市史に収められている。市の方からは倉を保存するよう勧められたが、20年ほど前に改装して事務所にした。

川の島は、現在の亘理大橋よりも海の側にあった。話者②が嫁に来たときにはまだその島はあったという。その土はトロッコで運んで、現在の堤防にしたという。そのため、現在では残っていない。新浜の人たちは半農半漁の生活をしていた。漁は部落共同で行う。鮭を主に獲っていた。

社会組織

新浜内では、同姓の場合大抵ホンケ・ベッカ(本家分家)の縁故関係がある。そのような関係によって結ばれている集団をイチゾク(一族)と呼んでいる。正月にはイチゾクのあいさつに回る。新浜には42軒あり、森、佐藤、平塚などの姓をもつイチゾクがあった。結婚式の席順などもイチゾクの間を考慮して決まっている。イチゾクが参加するため結婚式は大規模なものになることが多い。本家が指揮を執り、段取りや席順を決めていく。結婚する時には生年月日や職業まで記載した親戚の一覧表を交換する。娘が長野に嫁いだが、その時にもそういう表を交換した。新浜は部落を、1～4班の4つに分け、不幸があった場合にはその班で対応する。

湊(みなと)神社

阿武隈川の水害で上流から神社そのものが流れされてきた。それがこの地に流れ着いたので、

祀ることになった。これが湊神社の始まりだという。湊神社はもともと堤防のあたりにあったが、河川改修で現在の位置に移動した。御神体は中に入っていたかもしれないが、みたことはない。

春と秋と2回ずつお祭りする。旧暦3月2日と旧暦9月の何日か。現在では役員会で具体的な開催日を決める。かつては（少なくとも話者①が若い頃）神輿をかついで回っていた。その時は小さい神輿だったが、補償（堤防建築による移転？）でお金が入ったので、立派な神輿に作り直した。ところが、1トンもの重い御輿にしてしまったために、担げなくなり、近年（15年くらい前から）では軽トラックに載せて集落内を回る。それに、今は神輿の担ぎ手がないこともある。神輿を担いで練り歩く時は、羽織袴を着て歩いた。車で歩くようになってからは、洋服で参加するようになった。神輿は3つの部落の人たち合同で担ぐ。ひとつの部落で4人ずつ役員をたて、調整する。役員の任期は4年。彼らは祭の準備や食事に当たる。

湊神社の御輿は、神明社（蒲崎）脇の倉庫に保管されていた。小さいコンクリート製の建物だったが、今回の津波で流失した。昔は神明社の鳥居をくぐったところに建物があり、そこに神輿を納めていた。社務所的なところもあったが、津波で流された。神明社の倉庫を出た御輿は湊神社を經由し、まず松原のところに行き、海の方にむかって拝む。それは河口で遭難する船が多いので、安全祈願として皆で手を合わせる。それから、寺島・新浜・蒲崎の3つの部落をまわる。

お産の神様ということで、昔は新婚の家庭や区長の家やら名のある家をまわった。特に、新婚の家は必ず回ることにしている。神輿が回ってくる時は、家族皆集まって御祓いをうけて、御酒をあげて、御馳走を出したりする。お祓いは「お幣束をもつ人」にしてもらう。それは代々特定の家が担当している。

御祓いを行うのは蒲崎のA氏という人だった。彼は正式な専門の神主ではないが、竹駒神社や京都などへ講習に行って資格をもらっているらしい。正月には切り紙などを持参し、地鎮祭な



写真1 神武天皇社

どで祝詞を読みあげる。お幣束も自分で切っていたはず。家を建てる時や子どもが生まれた時に来てもらってお祓いをしてもらう。現在では孫が務めている。今年の正月には回って歩かないだろう。仮設にあり、また、仮設にいる人たちは神棚がないから、いつものように神様に何かをあげることもできないだろう。今年はこの状況もあって、祭りはしないと思う。今後もしばらくはできないのではないかな。

（話者②が現在80歳になるB氏に電話で確認し、B氏が母親から聞いた話として）湊神社は貞山堀の河口（水門）近くのタケダ家の長屋（貞山堀の渡し船の長屋）にて一時祀っていたことがある。カワグチ神社と呼んでいた。建物が壊れてきたので現在の場所に移し、ホウキ神様と一緒に祀られるようになったという。

神武天皇社

湊神社とは別に、新浜の鎮守として巨理大橋のすぐ下の神武天皇社がある。神武講があり、当番の人がごちそうを作り、皆で「神武天皇」と掘られた石を拜んで食事をした。これは旧3月23日に行われる。神武天皇社には、小さいながらも社務所的な建物があった。

屋敷神

オフクラさんという家を守る神様がいる。家の外にいる神様で、新浜では西側の角で家の前か後ろにある。石で造られた小さな社。正月にお幣束を納め、餅などを供える。

小正月

どんと祭が10年余りまえから始まった。14日の日中から行われる。しめ縄などを燃やすが、しめ縄にぶらさがっていたみかんを食べると頭が良くなるから、といわれて食べたが、こげて苦く食べられたものではなかった（話者②の話）。どんと祭が始まる以前には、14日の夜に各家でしめ縄等をオフクラさんが祀られた場所に燃やさず納めていた。家中のしめ縄などを集めて「ホーイ、ホーイ」というかけ声をかけつつ、外のオフクラさんのところへ持っていく。話者②がその義理父から聞いた話では、昔ヤヘイジという悪い人がいた。とにかくその人は悪い人だったようで、その霊を追い払うために「ヤーへ、ヤーへ。ホーイ、ホーイ」というようになったという。これは家の主が行う。先代のときの話である。

復興関連

震災後、花卉農家で手伝って貰っていた人を中心に「オアシス弁当」という名の弁当屋を始めた。彼女たちは60歳以上の人たちだが、旦那を亡くし日々どうしようもないので、何か仕事をしたいということで弁当屋を提案した。花屋の息子2人〔従業員?〕も手伝ってくれている。二木の松の向いにある話者の娘が経営する花屋の半分を利用している。もともと菓子屋だったところを花屋として借りていたため、裏に厨房がありそれが役に立った。

郷土料理のため肉が少なく野菜を中心としたメニューである。糖尿病患者などにもよいというので病院からの注文も多い。若い人には物足りないメニューかもしれない。話者(妻)もメニューと一緒に考案する等、色々と協力している。具体的なメニューは、ナスのズンダイ（ナスをふかして手で裂いた後塩で味付けして、ズンダで和える）、シメジと糸こんのクルミ和え、柿の白和え、サンマの佃煮、赤魚の煮付けなど。ゆず湯や麴味噌も販売する。このような郷土料理は、このあたりの年配の人にはとても喜ばれている。昼時に注文が集中するために、特に配達が大変である。



写真2 公会堂に残された太鼓